



門 3
號 3055
巻 1

ル 3
3055
1-2

諸國名義考序

掛末久母。安や亦畏炎。二柱御祖如神能。生
奈之多ま守る。大御國波之。母此は之米。
大八嶋やいひて。八乃嶋あや有ける乎。後や
字やく亦。数く亦わたり。朝ひ亦六十何箇
八國少形也。修考事理考源。其禮は之也。
大名持。少高名此大神多也。相並ハ之。作理

故
菊池三
九郎氏
大正十三年
一月

○諸國名義考

○本五方一

かゝる米奈一陸千里。神代より。松の流あり。山平塚あり。川を隔たり。海を隔たり。し。か久國形也。備はれり。そなきむ。そ六十餘里八國や定まれる中あり。或は上下東相なり。或は道の口。その中。その後や山あり。そなきは五十餘里八國あり。是は名は故由。そのはし。先の事ら考ふる。そは

平西のきりて。結ゆき。よし。ふと。結るも。阿多。柿。大のふは。ま。い。さ。う。り。お。れ。郷の名よ。始り。郡の名も。吾な。り。國の名も。あ。な。り。結。賀。松。本。久。そ。里。の。名。の。始。の。ゆ。き。よ。し。い。一。子。代。米。奈。一。語。結。松。う。り。言。え。る。事。一。あ。り。受。旅。寝。ま。る。野。邊。の。假。廬。か。り。米。奈。一。あ。り。よ。し。い。ひ。出。し。お。な。れ。築。千。歳。乃

後の今と理考可求む事多岐。和名能事と
澳津白玉。心せし得加多記置さる事有
き事乎。末采也。尔求む事心あとの久く
て。古人如し伝可多果も。今の代の人如
可辨。可傳心する事。引出記して。其倭言は
心解る事如く。あき事如く。其正しきは正し
末采と采て。諸國名義考や。心書を取ん。

女ははさけけ。其人は。角障。石見能
國也。勇真取。濱田の殿也。江戸法御館ふさふ
屋ふ。阿良多牙也。布智は。此高麻呂。あけ末
也。ま也。法書也。あけは。乃布也。や。
國は。法名のゆ名なり。志く。海軍に果人の。
此ふ。及よ。人見む。事。末也。法書也。
心は。さる事也。あけ。心。法書也。末傳

さくせや。かくしは。神凡の。伊勢水。水枝刺。
松阪乃郷。佐久々之。鈴の屋法。翁法。そ法
家起きし。本居の意。多比良。

(Faint bleed-through text from the reverse side of the page)

凡例

○伊邪那岐伊邪那美二大神の生成給ひ大汝少彦名オホニギハヤヒの
二神の造る固め賜い一八八嶋國をれど後よ數々よ
割られしころ五畿七道と定められしころ
よや定くれしころ畿内ハ孝徳天皇の御世よ
其、埜を定められしころ五畿といふ名目ハる日本
書紀持統天皇卷よ四畿内と始て見えしころハ河内
和泉れと一國よて割られしころ前より七道と定め
られしころのころたしころハ成務天皇
五年以東西為日縦南北為日横山陽曰影面山陰

○諸國名義考凡例

○上卷

一

曰^ニ背^ト面^トとある山陽山陰ハ六書故ヨ山阜之南向日謂^レ
之陽^ト山阜之北背日謂^レ之陰^トとある外國風^トもてこれ
しるしバ今の山陽道山陰道の事ハあ^レび古事
記水垣宮段^ニハ高志道^トとあるハ今の北陸道^トて東方^ニ
十二道^トとあるハ今の東海道^ト又日本書紀崇神
天皇卷^ニハ北陸東海西道丹波^トを四道^トとある景行
天皇卷^ニハ東山道十五國^トとある北陸東方^トとある
天武天皇卷^ニハ山陽道山陰道^ト東海東山山陽山
陰南海筑紫^トとある續日本紀文武天皇卷^ニハ
始て七道の号^トありて國造本紀^ニハ百四十四國^ト

國造を置とてこれよりハ郡里をも國と云^レ
る猶ハの本紀^ニハあ^レるもあ^レるべ^シ嵯峨天皇
の御代^ニハ越前國^トを割^テて加賀國^トを置^トとあり
六十六國^ト二嶋^トと定^メとあるハかく定^メとあるハ既^ニ
續日本紀^ニハ國の守^{カミ}ハ任^チら^レる事^ト志^トを^レ見^テて官
位^ト令^レハ國の守^{カミ}介^スなどの位階^トを分^ラれ^レとバそ^レやく
あり定^メとあるハ^レを全^ク備^メて物^ト小見^チありハ
延喜式^ニ和名抄^ニ等^トあり

○六十六國二嶋の名義ハ悉^クとあるハ^レとありて
それと未^ダ是^レを考^ヘ得^ル人^ナハ後世^ニ其名義^トの

論^ハ多^クき^ニあ^リぬ^レ或^ハ字^ニよ^リな^づく^レ或^ハ漢^ノ意^ニよ^リ陷^レて
皇國^ノの^いふ^く一^ハよ^クな^らば^今著^スる^ニこの^考ハ^師翁^ノ
説^トを^ゆく^くして^諸書^を引^類と^例と^をも^りて^愚意^を
を^述し^るあ^ら見^む人^外又^考へ^得る^説あ^ら我^ニ
さ^ら給^ハ速^ニ改^め直^して^む

○古事記志賀宮段^ニ定^ル賜^ハ國^々之^境云^々と^ある^レ日本
書紀成務天皇五年隔山河而方國縣隨阡陌以定
邑里と^ある^レ履仲天皇四年秋八月云々於諸國置
國史記言事達四方志云々と^ある^レ孝德天皇大化二年
云々且觀國々壇塿或書或圖持來奉^ル云々

天武天皇十二年遣伊勢王羽田公八國多臣品治中臣
連大嶋並判官錄史工匠者等巡行天下限方諸國之
境塿然^レ是年不堪限方十三年遣伊勢王等定諸國境
○續日本紀元明天皇和銅六年五月甲子畿内七道
云々土地沃墾山川原野名號所由又古老相傳舊聞
異事載于史籍言上云々と^ある^レ其境ハ
いづ^レこ^ノあ^らぬ^レと^ある^レ

○續日本紀聖武天皇天平十年八月令天下諸國造國郡
圖進云々こハ亡^クら^りぬ^レ絶^テら^る事^ナら^ず
○姓氏錄^ニ坂合部連大彥命之後也允恭天皇御世

造立國境之標因賜姓坂合部連（カカヒノサカヘノ）堺（カカヒ）坂合（サカヘ）の義（カキ）

○百練抄後堀河天皇嘉祿二年盜人切穿民部省文庫盜取文書諸國圖帳少々紛失云々（ハレハレノ書）のやい（カキ）の（カキ）書名（カキ）の（カキ）後元亨のころ撰（カキ）とく（カキ）圖帳の殘闕今（カキ）の（カキ）世（カキ）あり

○朝野群載（カキ）延長三年十二月十四日大政官符五畿七道諸國司應（カキ）早速勘進風土記事右如聞諸國可有風土記（カキ）文今被（カキ）左大臣宣（カキ）仰國宰令（カキ）勘進之若無底探求部内尋問（カキ）古老早速言上者諸國美知依（カキ）宣行之不得遲廻符到奉行（カキ）今亡びて（カキ）肥前

豊後の二國の（カキ）殘（カキ）又出雲風土記（カキ）天平五年二月卅日勘造とありて（カキ）古き書（カキ）を幸（カキ）の（カキ）釋日本紀万葉註釋（カキ）の外（カキ）風土記の文見（カキ）今引用（カキ）總國風土記（カキ）後世の書（カキ）を引（カキ）

○國号（カキ）よ（カキ）ハ木國倭國泉國津國越國豊國大國（カキ）一字（カキ）駿流河國相（カキ）模國武藏志國丹（カキ）迹波國但（カキ）遲馬國（カキ）三字（カキ）書（カキ）日本紀元明天皇和銅六年五月畿内

七道諸國郡郷之名著^{ツケヨ}好字^ヨ云々^ヨ延喜民部式^ニ
凡諸國部内之郡里等之名并用^{アヒテ}二字^ヲ必取^ヒ嘉名^ヲ云々と
あり一字あるハ韻字^{ヒツキ}と^シ或ハ上下前後と^シ或
或ハ由^レある^レて二字と^シ三字あるハ畧^ハきて二字
と^シ嘉名を唱へ好字^ニ改ら^レり^テ中^ニハ字音の
号も出来^ル也

○國号を何州某^カ勅^ノをとい^フハ後世小ざ^ラしき儒者
外國^ニ習^{ヒテ}書始^メグ廣く^シる^レる^ニて

朝廷^ニの御制^ニあり^テ故^ニ古書^ニあり^テる^レる^ニ名目^{アリ}
あ^リて物の名を乱^ルハ儒家の常^ニあり^テる^レる^ニ事^ハ
い^ハ可畏^キ事^{ナリ}る^レ神代卷^ニ洲の字をわ^カし^ムハ
嶋とい^フ義^ニて州^トハ異^{ナリ}る^レ

○諸國の廣狭行程遠近民戸田税人物産物等ハ諸書^ニ
わづ^クて^テい^ハる^レる^ニび^テ國の名義^ヲを論^ズハ^シの^レ

文化六年五月

藤原 彦麻呂



諸國名義考上卷

石見國濱田家人

齋藤彦麻呂誌

畿内

日本書紀孝德天皇卷ノ凡畿内東自名壑横河
 以來南自紀伊兄山以來西自赤石檜淵以來北自
 近江狹々波合坂山以來為畿内國とあり訓法ハ
 北山抄ノ字治都久仁とありさて民部省圖帳
 ノハ五畿垣内とあり畿と云るハ田令ノ凡畿内
 云々義解ノ謂畿猶壇也言平畿之内也と見え
 詩商頌玄鳥之篇曰邦畿千里惟民所止

○諸國名義考

○上卷 一

東陽許氏曰王者所居地方千里謂之王畿居天下之中焉と文選注天子居千里曰京畿焉と刑法志曰同十為封封十為畿畿方千里るといへる外國の号を仮用させ給へるなり

山城

和名抄よ山城

夜萬之呂源唱朝臣為重任之時奏請以河陽離宮為國府

とあり名義ハ日本

紀略よ山勢實合前聞云々此國山河襟帶自然作城因斯形勝可制新號宜改山背國為山城國云々まゝ山城志よ以其在大和國北為名とありハヤもよろゝありぐごとことありめとて古事記傳よ都藝泥布夜ハ継苗生也るり

継苗との山の樹を伐取らる跡よ又継て樹を生し立む料よ植る苗とつゆ云々かの山の樹の継苗を生さる地を山代と云あるべし凡て山の用の材を取出と主とせり故よ即材を伐取る事と山と云て此ハ其伐出せべき材の継苗城生さる地ある故以て山代と云る萬葉集よ開木代とも書るハ此義ありさればこの枕詞よ継苗生之山代と云意よつゞけらるありさて山代ハゆくろり一國の大名よても有べしれど又思ふよ始ハかの継苗生と云山代より負る一郷あどの名よても有らむ云々とありといの物遠きぐごとときとゆれど

稱を生し立る田と苗代といふ類ここの著好字まこと
取嘉名とあるをと思ふ誰か疑ふむいふを
らうで字義よるづめる人のいふよくは續日本後紀
仁明天皇兼和三年冬十月己未兼前之例畿内國次以
大和國處之第一敕宜據新式改之以山城國處之第一

大和

和名抄は大和於保夜萬止國このはり一郷の名より

一國の名とありてより御代々天皇の大宮をきませり

國をれ其名廣くありて後よの皇國の大号と成る

故は大字を添て大倭と云一國の倭も大字を

添るへの用の二字の例あり名義の釋日本紀よ弘仁

私記序を引て天地剖判泥濕未乾是以栖山往來因多

蹤跡故曰耶麻止又古語謂居住為止言止住於山也

延喜開題記は大倭國草昧之始未有居舍人民唯據山而

居仍曰山戸是畱於山之意也或説は開闢之始土

濕而未乾至于登山人跡著焉仍曰山跡と云るるど

いづれも古意はあはれ縣居大人の山門ありと云

くこの一國の中平らよして四方山あり荒木

田久老が觀落葉の首書はの屋庭所の約とありと云

この始て白檮原宮を建られ故るべし師翁の國号

考^ヤ山^ヤ處^ト山^ヤ内^ト山^ヤ秀^ホの三種^ミの考^カあり其中^ナ山^ヤ内^ト山^ヤ秀^ホの
同意^オあり日本書紀神武天皇卷^ニ東^ニ有^ル美地青山四周
云々益六合之中心乎云々^ト玉^タ牆^カ内^ノ國^ニ及^テ至^リ饒^ニ速^ニ日^ニ命^ト
乘^リ天^ノ磐^ノ船^ニ而^テ翔^リ行^ク大^ニ虛^ニ也^ト耽^リ是^ノ鄉^ニ而^テ降^リ之^レ故^ニ因^リ目^ノ之^レ曰^ク虛^ニ空^ト
見^ル日本國^ニ矣^ト景行天皇卷^ニ十七年云々歌之日夜摩^ト
苦^ト波^ハ區^ク珥^ニ能^ニ摩^ニ保^ニ羅^ニ麼^ニ多^ニ々^ト儺^ニ豆^ニ久^ニ阿^ニ烏^ニ伽^ニ枳^ニ夜^ニ摩^ニ許^ニ莽^ニ例^ト
屢^ニ夜^ニ摩^ニ苦^ニ之^レ于^テ漏^レ破^レ試^ニ云々^トありて又神武天皇卷^ニ
秀^ホ真^ニ國^ニありと思へ山^ヤ秀^ホとありどもありしる
世^ニ山^ヤ外^トありといひ説^ハ山城^ニ平安^ニ京^ニと内^トと
ら後世の俗説ありさてさめらるる字はつきて
いひしる僻儒^ニの常^ニよていとひがごとく之^レ耶^ニ馬^ニ臺^ニの字^ハ
魏志といひ書^ハ小^ニありといひ夜^ヤ方^ハ登^トといひを聞^キて然^シ書^キ
し又^シ倭^ヤの字^ハ始^テて前漢書^ニありて後漢書^ニ小^ニ倭^ニ奴^ト
国^ニ云々倭^ヤ国^ニ之^レ極^ニ南^ニ界^ニ也^トあり外國^ニよてハ皇國^ニを倭^ヤ国^ト
といひ筑紫^ノのそとを倭^ヤ奴^ニ国^トといひしとらと唐書^ニ小^ニ
日本^ニ古^ニ倭^ニ奴^ト也^ト誤^リする小^ニまどいされてひとの心得^ハ
るひといひ言^フことわりの字とも捨^テ給^ハば用^ヒひさせ
給^ヒし又^シ養^ヤ德^トの字^ハもき字^ヲを撰^ヒれしる之^レ和^ノの字^ハ
倭^ヤ小^ニ音^ニの通^ス故^ニ好^キ字^ヲ改^メらるる之^レ字^ハいづれ
名^ハの夜^ヤ方^ハ登^トよて名^義ハ山^ヤ秀^ホあり事^上よいはるが如^ク

續日本紀聖武天皇天平九年十二月丙寅改大倭國為大養德國十九年三月辛卯改大養德國依舊為大倭國
拾芥抄天平勝寶年改為大和國

河内

和名抄小河内加不知國府在志紀郡古事記及國造本紀ハ大河内トあり姓氏錄ハ凡河内トあり名義ハ古事記傳ハ倭ノ京マテ山城ノ大川ノ此方あり國名ハありハ大河内ト云々と諸國の名必ニ字ハ定られしハ大とバ除きハらむ云々とありこの意ありべし
萬葉集ハ瀧津河内云々とありハも川のところとあり

ハ大河内志ハ以皇都在和州大河繞州西北故名とあり大河ハ山城ノ淀川ありハ日本書紀仁德天皇十一年ノ紀ハ河内國茨田堤と造らハしと見え延喜神名式ハ河内國茨田郡堤根神社あり姓氏錄河内皇別ハ茨田宿禰八井身命ハ之後男野見宿禰仁德天皇御代造茨田堤又仁明天皇嘉祥元年ハ築茨田堤とありハさて畿内志ハ長柄川清河第二支上古水道唯是一川横流不一仁德天皇疏導堀江延曆中通三國川然猶汎濫不已疏柴島北故水道漏水勢于三國川名曰中津川今二重堤即此後ハ名柄川塞此水路童謡曰摂津國能

中津河原^{ナカツカハ}袁^{ハシ}瀬^セ岐^キ加^カ祢^ネ豆^マ云々^トあり^ク續^ツ日本紀^ニ聖武^ノ天皇^ノ天平十三年^ニ夏四月^ニ辛丑^ノ云々^ト檢^テ投^テ河内^ノ與^テ摂津^ノ相^テ争^ハ河堤^ノ所^ニと^テ桓武^ノ天皇^ノ延^シ暦^シ七年^ニ三月^ニ甲子^ノ云々^ト河内^ノ摂津^ノ兩國^ノ之^レ壞^レ堀^レ川^ヲ築^テ堤^ヲ自^レ荒陵^ニ南^ニ導^キ河内^ノ川^ヲ西^ニ通^ス於^テ海^ニ云々^トあり^ク神護^ノ景雲^ノ三年^ニ河内^ノ職^ヲと置^キと^テ一^ノことあり^クも^トあれ^バ川^ヲ負^ヒ國^ノ名^ヲあり^クと^テや^リつ^クなり

和泉

和名抄^ニ和泉^ト以^テ都^ニ三^ノ國^ノ府^ノ名^義ハ^ニ摠^ニ國^ノ風^土記^ニ和泉^ノ國^者

在^ニ和泉^ノ郡^ニ

本^ニ與^テ河内^ノ國^{合^テ為^ス一^ノ國}神護^ノ景雲^ノ丙午^ノ歲^ガ大^ノ鳥^ノ郡^{鳥^ノ島}

國^{其^ノ後^ニ為^リ和泉^ノ國^也和泉^ノ者^{國^ノ土^ノ涌^{出^ス元^ノ縁^也と^テあり^ハい^ハふ}}}

師翁^ノの玉^ヲつまよ^ク和泉^ノの和^ノの字^ハ和泉^ノ郡^{あり}て上泉^{カミイヅミ}下泉^{シモイヅミ}と^テ郷^トも^トあれ^バを^モと^クり^テ出^スる^{國^ノ名^ヲあり^ク事^ハ論}か^ハかく^テ其^ノ郷^ノの府^中村^ハ今^も和泉^ノの井^{とい}へ^ルめ^でと^クも^ク清^水あり^て泉^井上^{神社}和泉^{神社}あり^じも^{あり}て^式よ^もも^も然^るは^並河^氏が^かろ^ろ和泉^志を^とれ^バこ^の和泉^井と^舉て^{其^ノ水^{清^且甘^と記^セを^と以^テ思^ヘバ}此^{清^水上^つ代^々い^く清^くて^{甘^みあり^ハ故^ハは^なぎ^いづ^もと^{号^シて}和泉^と書^クり^トを^{其^ノ里^人あり^ハた^い泉^との^いひ^{あり}へ^ルが^ひろ^ろて^{名^高き^水あり^レを}京^人あり^モ泉^との^いひ^{あり}り^トあり^トて^{郡^ノ名}}}}}

よも國の名よもあつたをよもて國郡よもこの名二字よ
かく事あり故よ文字よハ必本の名の如く和泉とい書
るるべし云々といしれり續日本紀元正天皇靈龜
二年春三月癸卯割河内國和泉日根兩郡令供珍努官
夏四月甲子割大鳥和泉日根三郡始置和泉監焉聖武
天皇天平十二年八月甲戌和泉監并河内國焉孝謙天皇
天平寶字元年五月し卯和泉國依舊分立とありけり
和泉并ハハ河内國よありしるるべし日本書紀欽明
天皇卷よ河内國泉郡芽濤海とあり

攝津

和名抄よ訓法ありた津とのりよびよきり名義ハ即
津あり津ハ同抄よ四聲字苑云津渡水處也唐令云諸渡
關津及乘船筏上下經津者皆當有過所和名とあり然ると
神武天皇御代よ奔潮太急よありけり浪速國と云し
後よ訛て難波といしり國史よ見えり其後仁德
天皇御代よ皇都とあり給ひり高津宮と号くこと
高津とハ岸高々れをよ下河邊長流が續歌林良材
集り此國風土記を引て天稚彦よ屬て下りし神天
探女磐船よ來て爰よ泊る故よ高津と号くといしり
萬葉集よ久方乃天之探女之石船乃泊師高津者淺尔

○諸國名義考

○上卷 七

家留^カ香裳^カとして撰^{セン}の字ハワ^ワカ^カる義^ギと^トワ^ワル^ル五勝^ゴ間^{カン}の
職員^{シヨクイン}令^{ノリ}は撰津^{センツ}職^{シヨク}帶^{オビ}津國^{ツクニ}云々^トある撰^{セン}の字ハ難^{ナニ}波^ハと
津國^{ツクニ}と撰^{セン}て掌^{ツカサド}る^ルあり静謐^{シヨクニ}の意^イと^トなり^ルハ
あ^ハらば^ハかくて延曆^{エンリョク}十三年^{トシノミ}停職^{テイシヨク}為^シ國^{クニ}と^トあり^ルて夫^{コノ}より
其官^{シヨク}諸國^{シヨクニ}司^シの列^{レツ}と^トなり^ル然^シと^トせ^テも猶^モり^ルの^ノま^ハら^ズ
撰津^{センツ}と^トあり^ル故^ニは後人^{コノノチノヒト}是^レを元^ノより國名^{クニノナ}を思^フ
り^ル云々^ト俗^ノにセ^ツ所^ノと^トあり^ルハ^ハり^ルよ^ハた^ハら^ズび^ハ今世^{イマノヨ}も
津^ツの國^{クニ}津^ツの守^{カミ}る^ルと^トあり^ル正^シし^テり^ル云々^トあり^ル
あり^ルハ^ハバ^ハ字彙^{ジイ}に撰^{セン}静謐^{シヨクニ}也^{ナリ}と^トあり^ル漢書^{カンショ}に撰^{セン}然^シ天下^{テンカ}安^ク
ら^ズとい^フる^ルよ^ハら^ズり^ルハ^ハり^ルべ^シ職員^{シヨクイン}令^{ノリ}は撰津^{センツ}職^{シヨク}

帶^{オビ}津^ツ大夫^{ダイフ}一人^{ヒト}掌^{ツカサド}祠^{ヒコ}社^{シャ}戸^コ口^ク簿^ボ帳^{チャウ}字^ジ養^{ヤウ}百^{ヒャク}姓^{シヨウ}勸^{ケン}課^カ農^{ノウ}桑^{サウ}糾^{キウ}
察^{サツ}所^{ショ}部^ブ貢^{クワン}舉^{キョ}孝^{コウ}義^ギ田^{テン}宅^{タク}良^{リョウ}賤^{ゼン}訴^ソ訟^{ソウ}市^シ廛^{チン}度^ト量^{リョウ}輕^{ケイ}重^{チュウ}倉^{ソウ}廩^{リン}
租^ソ調^{テウ}雜^{ザク}徭^{リョウ}兵^{ヘイ}士^シ器^キ仗^{チャウ}道^{トウ}橋^{キョウ}津^ツ瀟^{シヨウ}過^カ所^{ショ}上^{ジョウ}下^ゲ公^{クウ}使^シ郵^{ユウ}驛^{イッ}傳^{デン}馬^バ
闌^{ラン}遺^イ雜^{ザク}物^{モノ}檢^{ケン}校^{コウ}舟^{フネ}具^グ及^{ツキ}寺^テ僧^{ソウ}尼^ニ名^ナ籍^{シヨク}事^ジと^トあり^ルテ^テ類^{レイ}聚^{ジュ}
二^ニ代^{ダイ}拾^{シヨウ}及^{ツキ}日^{ニチ}本^{ホン}後^ゴ紀^キに延曆^{エンリョク}十^{ジュウ}二^ニ年^{ネン}三^{サン}月^{ゲツ}九^ク日^{ニチ}大^{ダイ}政^{テイ}官^{クワン}符^フ應^{オウ}
停^{テイ}撰^{セン}津^ツ職^{シヨク}為^シ國^{クニ}司^シ事^ジ右^ウ被^ヒ右^ウ大^{ダイ}臣^{チン}宣^{ケン}佺^{セン}奉^{ホウ}教^{キョウ}難^{ナン}波^ハ大^{ダイ}宮^{クウ}既^キ停^{テイ}
宜^イ改^{カイ}職^{シヨク}名^ナ為^シ國^{クニ}其^{コノ}二^ニ季^キ祿^{リョク}及^{ツキ}月^{ゲツ}料^{リョウ}並^ニ從^{ジュウ}停^{テイ}止^トと^トあり^ル國^{クニ}造^{ゾウ}
本^{ホン}紀^キに據^キ准^{ジュン}法^{ホウ}令^{レイ}謂^{イフ}撰^{セン}津^ツ職^{シヨク}初^{ハツメ}為^シ京^{キョウ}師^シ柏^{ハク}原^{ゲン}帝^{テイ}代^{ダイ}改^{カイ}職^{シヨク}
為^シ國^{クニ}と^トあり^ル

東海道

延喜氏部式に伊賀伊勢志摩尾張三河為近國
遠江駿河伊豆甲斐為中國相摸武藏安房上總
下總常陸為遠國とあり民部省圖帳に八東海
濱道とありてうなつらとあり西宮記郡司
讀奏條よりいへつら又うへつら又ひら
かゝのうゝのうゝのうゝのうゝ北山抄にハ宇女都
美知又字倍都道とあり

伊賀

知名抄に伊賀

以加國府 在阿拜郡

名義ハ伊賀國風土記古本逸文に

猿田彦神女吾娥津媛命云々又此神之依知守給國謂

吾娥之郡其後清見原天皇御宇以吾娥之郡分為國之名

後改伊賀吾娥之音轉也とありこの國の伊賀郡に阿我

郷ありとらると同國延長の風土記にハ伊賀國者往古屬

伊勢國大日本根子彦太瓊天皇御宇癸酉方而為伊賀國

本此号者伊賀津姫之所領之郡也依為郡名亦為國名と也

あり伊賀津媛ハ崇神天皇の御女あり國造本記に伊賀

國造志賀高穴穗朝御世皇子意知別命三世孫武伊賀都

別命定賜國造難波朝御世隸伊勢國飛鳥朝代割置如

故ち倭姫命世記に天武天皇庚辰歲七月割伊勢四郡

立伊賀國とあり

伊勢

和名抄云伊勢以世國府在鈴鹿郡名義ハ伊勢國風土記云伊勢

國者云々神倭磐余彦天皇自彼西宮征此東州云々天

日別命奉勅東入數百里其邑有神名曰伊勢津彦天日別

命問曰汝國獻於天孫哉答曰吾覓此國居住日久不敢聞

命矣天日別命發兵欲戮其神于時畏伏啓云吾國悉獻於

天孫吾敢不居矣天日別命問云汝之去時何以為驗啓

云吾以今夜起八風吹海水乘波浪將東入此則吾之却由

也天日別命令整兵窺之比及中夜大風四起扇舉波瀾

光耀如日陸海与朗遂乘波而東焉古語云神風伊勢國者

常世浪寄國者盖此謂之云々天皇大觀詔曰國空取國神

之名号伊勢即為天日別命之村地國云々とありこの

万葉註釋に引る支る釋日本紀に引る支るに按國

風土記の文との大同小異ありこれ古傳のやまと思ふ

伊賀津媛の如く國号ハありて此國に住しゆる

伊勢津彦と云ふてありて或人の伊須受の

約に轉るるありて又ハ五瀬命より負

名ありといへり立入信友ハ風土記に大風四起云々と

あるを思へり伊ハ息よて勢ハせくせむるせり

せくらぐらこしるせよてもて物のつとほひあり

いへりこの神大風を息吹放つ徳あるよりして伊勢津彦と負しよやあゝむむいへり

志摩

和名抄よ志摩之萬國府在英虞郡名義ハ或書よ志摩國風土記の逸文よて引よる小志摩為伊勢島之意也放地出海中之島也後成國名云々こハ國體よよりて号けりるあるへ一此國答志郡答志崎海中よより出て參河國いへり島と對ひ合ひいへり鳴の國ともいへりよるある志陽畧志よ伊良湖崎在伊良湖村此地者三河國渥美郡也此地志神嶋一里以近混志摩國云々とありとて

國造本紀よ島津國造とありいへり國の國造あり

尾張

和名抄よ尾張乎波里國府在中島郡名義ハ尾張國風土記よ尾張國者經世穗曾積古之所領行也神倭磐余彦天皇東征之時討伏湯貴首人歸化之場海部佩室臣奉射天皇天種子命以三角石弓及玉太羽矢射殺佩室臣討終於海部氏姓因此號其國謂於波里乃國謂尾張者音之訛也云々とありいへりよる事あり古老の云傳へあるべしいへりよる事ありいへりこハ十拳劔より負し名あるべしその故ハ古事記よ故所斬之刀名謂天之尾

羽張亦名謂伊都之尾羽張とあるハ草薙劔カサキハありぬど
尾羽張ハハ劔先サキの中廣ヒロと云ふハ古事記傳に見ん
るハカハ草薙劔も劔尾ハの中張ハと云ふハ久キウヨヨカカ号カケ
ハ天アメ之波士ハ弓ユミ天アメ之孫ハ々々ハ知チ々ハハ坂瓊サカニの玉タマ々ハ々ハ
ひとりの名ナハありぬをも合アヒせ思オモふべハ日本書紀神代
卷ハ草薙劔此今在尾張國吾湯市村即熱田祝部所掌
之神是也とありぬハ尾張國風土記ハ熱田社者昔日本
武命巡歷東國還時娶尾張連等遠祖宮酢姬命ハ宿ヤ於
其家夜頃向廁以隨身劔掛於桑木遺之入殿乃發馬更往
取之劔有光如神不把握之即謂宮酢姬曰此劔神氣ハ互
奉齋之為吾形影因以立社熱田鄉為名也とありぬ熱田社
緣記ハ同トハされど國史ハハハハハハハ異ヒトハ古事記日代
宮殿ハハ倭建命云々還來尾張國入坐先日所期美夜受
比賣之許云々以其御刀之草那藝劔置其美夜受比賣
之許而取伊服岐能山之神幸行云々とありぬ日本書紀
景行天皇卷ハ日本武尊更還於尾張即娶尾張氏之
女宮簀媛而云々解劔置於宮簀媛家而云々とありぬハ
古語拾遺ハ其草薙劔今在尾張國熱田社未叙礼典也
とありぬ日本書紀天武天皇卷ハ朱鳥元年ハ天皇病ハ出デ示シ
草薙劔即日送置于尾張國熱田社云々とありぬ事ハも

ありかよありきと、劔の尾羽張り、負し國名とありき
し、古事記傳より尾張國名義の思ひ得ば萬葉集
十三より小治田之年魚道之水乎云々續日本紀二十九より
尾張國山田郡人小治田連藥等八人賜姓尾張宿禰と
あるを合せて思へば尾張を小治田とも云ふ若
然らば即小治より田より依りる名あるべしと云ふ
又葛城の高尾張りうつろくとも云ふ
姓氏錄より葛木忌寸高御魂命五世孫劔根命之後也と
ありきもありきとありき

参河

和名抄小参河 三加波國府在寶飲郡彦麻呂云 今ハ飲と飯と誤てほひの郡といふ 名義ハ或書より
引くる参河國風土記逸文より参河國有三川一曰男川二
曰豊川三曰矢作川男川者河上有山神白髮明神也豊
川者此河上有長者民屋豊鏡故曰豊川矢作川者日本武
東征時於河邊多作矢故曰矢作川とあり古事記傳より
男川ハ今大平川といふ豊川ハ吉田川ありといへり
或説より男川ハ賀茂郡より出て池鯉鮒の西今園の
東を南へ流る川ありと大平川ハ非とも云ふ
云々とあり立入信友云今遠江は二河ては郷ありて
よく似たりしときと内彦磨思ふより三大川よりして

三河國と云ふ号しハうつるを物か又思ハバ數を
いづびたゞ大川と稱へて御川と云つてふてもあ
むらこハるるまりの

遠江

和名抄云遠江 止保太阿不三 名義ハ或書云引云遠江國
國府在豊田郡 風土記の逸文云近江始書淡海有大江自帝都近故改
近江又遠江始書遠淡海此國有大江自帝都遙遠改
名遠江とありハ阿波宇美ありハを後云京の
遠近よりして遠つ淡海近つ淡海とせしむるを必用
二字の例ありハ遠江近江と書る事ハありぬるを

和名抄云止保太阿不三とあるハ轉約あるを後世止保
多不美と云るハ約とあり古事記傳云此國云
古ハ湖ありハを以て此名を負へり近江國の京云近
江云對へて遠とハ云るハさて其湖ハ明應のころ甚
地震て地断て南の海に連るハ其断る所を今
切といふ延喜神名式云遠江國磐田郡淡海國王神社
磐ノノ 同國濱名郡猪鼻湖神社とありハといふれ
文德實錄嘉祥三年八月戊申詔以遠江國角避比古神列
宮社先是彼國奏言此神叢社瞰臨大湖湖水所漑舉土
頼利湖有一口開塞無常湖口塞則民被水害湖口開則

民致豐穰或開或塞神實為之請加崇典為民祈利從之

駿河

和名抄云駿河須流如國府名義ハ萬葉集云打緣流駿河在安部郡

能國云々とある如く尖川の意あるべし東遊駿河

舞歌云須留可奈留宇止波末仁宇知与須留奈見波奈々

久佐乃云々ともありこハ川ありハ海ありハいづこも

浪ハつよく打らるべしれど万葉集の哥よゆりありし

ゆみのももて此國の川ハ山より落て海に入る水のけ

り多れハ川波強く打らるる勢ひの猛烈あるよりて

尖川國と云あるべし此國ハ駿河郡ありりこハこ

より出り名あるべし此國の風土記云駿河有三大河而

其濤勢如駿馬馳千里故為國号オシイキホヒも薦河者依其河流

薦々而不知淀溜也所謂志通波他河不二河大堰河也トシテ

ありハ共ニ字ニあるべし也

伊豆

和名抄云伊豆國府在田方郡名義ハ或書ニ引る伊豆國風土記

逸文云伊豆東相模西駿河出其中間之國故伊豆則出之

義也云々とあり彦麻呂思ふニ出湯の約イデもてハあり

ざり准后親房記云此國風土記を引て替温泉玄古

天孫未降也オホナムチノミコト大已貴尊与少彦名我秋津洲憫民天折始

製禁葉湯泉之術伊津神湯又其數而箱根之元湯是也走
湯者不然人皇四十四代養老年中開基非尋常出湯一
昼夜二度山岸屈中火焰隆發而出溫泉甚熾烈鉞沸湯以
種盛湯船浸身者諸病悉治云々とあり今も熱海走湯山
伊東松原などの温泉あり古本和名抄も温泉一曰以天由
出湯也とあり風土記も割駿河國伊豆乃埜号伊豆國云々
國造本紀も難波朝御世隸駿河國飛鳥朝御世方置如故
甲斐
和名抄小甲斐加比國府在八代郡名義ハ鴨祐之が大八州記も甲
斐之為言飼也飼養駒馬之謂因以為國號乎とあり

日本書紀雄略天皇十三年甲斐黑駒云々とあり續日本紀
聖武天皇卷も甲斐國獻神馬黑身白髮尾云々とあり
甲斐國風土記も都留郡有牛馬之牧毎年依本寮之命
貢駿馬肥牛云々とあり類聚三代格も天長四年十月十五日
大政官符置甲斐國牧監事云々頃年蕃息漸多繫飼歲
倍北牡之數于今千餘而至當監事品秩稍卑按檢馬政
云々とあり平氏太子傳略も甲斐國貢一驪駒四脚白者
云々とあり年中行事哥合も甲斐駒牽あり六帖も小笠
原への御牧もあり駒もいれはどろろろろ袖もと
あり和名抄も甲斐國巨麻郡逸見郷あり今も黑駒山

神あごを加牟とりのハ下言の連く時の事あるハ此國
名も佐賀牟とりのハ佐賀牟の國佐賀牟の小野
るど連ねりし時の唱よてど有るむ云々とりのハ小
りして彦麻呂の思ひゆる事あり同記同段よ
俊建牟云々^{イタシテクミコト}到足柄之坂本^{イカモトニキミシス}食於御糧處^{ミカレヒトコロニ}其坂神化^{ナリシヨキシカニ}白鹿
而來立爾即以其昨遺之箭片端待打者中其目乃折殺也^{エルクカダハシクヲチウケテ五ハアトイテソノノニ}
云々とあるを思へバ坂神國の畧りよてハありざる
是のり前よ佐賀牟能衰怒と謠ひ給ひし事ありてハ
其坂神の古くり此足柄の坂小住給ひし事ありてハ
命の幸の時よ始て出りよてハありてハありてハ

いのが強言あり

武藏

和名抄小武藏^{牟佐之國府}名義ハのり考得ば縣居大人ハ
身狭上^{ハサガミ}の對ひより身狭下^{ハサガヒ}ありしとりのハれつれど諾ありぬ
事ハ上よ云る古事記傳よ牟邪志國今ハ邪志^ガと清て唱よ
るど濁るべし此邪字より藏字より万葉集十四り
牟射志野と書る射字いづれも濁音よ用る例ある名義
のり思ひ得ばあり立入信友云國造本紀よ先邪志
國造の次よ胸刺國造とあるも近き地名と聞えり胸
刺身刺るの古事よりりる地名ありむといへり續

日本紀稱德天皇神護景雲二年六月癸巳武藏國獻白雉
云々奏云雉者斯良臣一心忠貞之應白色乃聖朝重光照
臨之符國號武藏既呈戢武崇文之祥云々とあるハ
り年邪志の三字を好字小改め二字に定め武藏と書
て志字を畧くせしむ後此國より白雉を奉り
しつきて武藏の二字を祝して奏しし詞あり
必しも國名の起ると莫思ひ誤るると或書ふ武藏
國風土記として引く小武藏國秩父高者其勢如勇者怒立
日本武美此山奉為祈禱以兵具納埋岩藏故曰武藏と
いへるハいづれへ字音のるも事とも和銅の勅命とも

とぬ後人の字義よるづゝる偽作るゝ不ふかくよれ
がき國号あり續日本紀光仁天皇寶龜二年冬十月己卯
大政官奏武藏國雖屬山道兼兼海道公使繁多祇供難堪
其東山驛跡從上野國新田驛達下野國足利驛此使道
也而枉從上野國邑樂郡經五箇驛到武藏國事早玄
日又取同道向下野國今東海道者從相模國夷參驛
達下總國其間四驛往還便近而去此就彼損害極多
臣等商量改東山道屬東海道公私得所人馬有息奏可

安房

和名抄云安房阿波國府在平群郡名義ハ南海道の阿波國より

拾遺^ノ天富命更求^ニ沃壤^ヲ分^テ阿波齋部^ニ率^テ往^リ東^ニ土播殖^ス麻^ヲ穀^ヲ好^キ麻^ノ所^ニ生^レ故^ニ謂^フ之^ヲ總國^ノ穀^ノ木^ノ所^ニ生^レ故^ニ謂^フ之^ヲ結城^ノ古語^ニ麻^ノ謂^フ之^ヲ總^也今

為^ニ上總^ノ下總^ノとありこの義なり和名抄^ニ下總國^ノ相馬郡^ノ二國^是也

布佐^ノ郷あり續^シ日本後紀^ニ仁明天皇^ノ美和二年三月辛酉^ニ下總國^ノ人陸奥鎮守外後五位下勲六等物部^ノ逆瑳連^ノ熊猪

改^テ連^ト賜^フ宿^ヲ祢^ト云々昔物部^ノ小事^ヲ大連^ト錫^テ節^ト天朝^ヲ出^テ征^ス坂東^ノ凱歌^ヲ歸^リ報^シ籍^ヲ此^ノ功勲^ヲ令^テ得^ル於^テ下總國^ノ始^テ建^ツ逆瑳郡^ヲ仍^ニ以^テ為^ス

兵^是則^ニ熊猪等祖^也とありこの逆瑳^ハ佐總^{あり}とあり^ニ昔^キ此^ノ國^ニ生^ス大楠^長及^テ數^百丈^時帝^怪之^ト古^之大史^奏曰^ク天下

さて或書^ニ此國風土記^とて引^ケる^ハ總^謂木^枝也

大山事也因^テ茲^ニ斬^リ捨^ル彼^ノ木^ヲ倒^シ南方^也上^枝曰^ク上總^下枝^曰下總^也云々とありハい^ハ今世^ハかづ^クとありふ^クとい^ハ略語^{なり}

常陸

和名抄^ニ常陸^{比太知國府}名義^ハ古事記^傳古今顯注^ハい^ハこ^ハち^ちと^いハ^ハを契^沖陸^をか^らと^より^ノ事

い^ハこ^ハち^ちと^いハ^ハを契^沖陸^をか^らと^より^ノ事

極^ニら^レば^らし^ク云々とあり誠^ニ然^ルべ^シ常陸國風土

記^ニ往來^ノ道路^不隔^テ江海^之津瀆^郡郷境^場相^續山川^之峯^谷取^近通^之義^以即^ニ名稱^焉云々抄^云此國中^ニ道路^踏江海

陸地一續之直路とあり、萬葉集に衣手常陸國云々と
あり、同風土記に倭建尊巡狩東夷之國幸過新治縣所
遣國造毘那良珠命新令堀井流泉淨澄尤有好愛時停
輿馱水洗御手御衣之袖垂泉而沾依漬袖之義以為此國
之名風俗諺云筑波岳黑雲挂衣袖漬國是矣とあり、
曝井當其以南出坂中水多流尤清謂之曝井緣泉所居村
落婦女月會集院布曝乾云々ともあり、この
傳へあり、又ハ東方の極なる日高見の約を轉
小てハあり、又ハ日本書紀景行天皇卷に日本武尊云々
蝦夷既平自日高見國還之西南歷常陸至甲斐國酒折
宮云々あり、武内宿禰自東國還之奏言東夷之中有日高
見國其國人男女推結文身為人勇悍是摠曰蝦夷亦土地
沃壤而曠、此國風土記を万葉註釋に引く、ハ自
黑前之山到日高之國云々時人謂之幡垂國後世言便稱
信太國とあり、釋日本紀に引く、ハ古老曰御宇難波
長柄豐前宮之天皇御世云々分筑波茨城郡七百戶置信
太郡此地本日高見國云々とあり、延喜神名式に陸奥國
桃生郡日高見神社あり、立入信友云、日高ハ景行天皇紀
と思ふ、今の蝦夷地にて常陸ハハの日高ハ通不道
るハ日高道とありといふ、この説いふめ、

こと思へば頭昭が説も捨ぐく或書は風土記として引
くくは此國之邊常鹽滿民家多有煩故宜曰此國干立
成陸則百姓安故曰飛多智也やあるはいつとぞりも

東山道

延喜民部式は近江美濃為近國飛彈信濃為中國
上野下野陸奥出羽為遠國とありて西宮記は
かゝのやまのしら又いづがのしら又うめつめらと
あり北山抄は山乃道と東乃道とあり

近江

和名抄は近江 知加津阿不三 名義は淡海とこの國は太湖

あるの急は負せり名あり續日本紀元正天皇養老元年
九月丁未天皇行幸美濃國戊申行至近江國觀望淡海と
ある淡海ハ則太湖と云るよて此國の名義あり
とるを近つ淡海といは遠つ淡海と對しとる名あり
古事記傳は遠江と對して近つ淡海といは古も今も
常は阿不美とのと云る故師ハ古事記は近字ありハ
後人の加へしと云とありとありとありとありとあり
國造本紀は遠江とバ遠淡海と書とと近江ハた淡
海とのと書と藤原不比等公薨去の後近江國を封て
謚成字音よて淡海公と賜ひしとありとありと淡海の

字と用られしことありしは阿波宇美と唱へしこと
うつらうつらとありしこと

美濃

和名抄に美濃國府在不破郡名義ハ各務野青野賀茂野なりと
あれバ三野なるなりハ野と稱して真野なるなり上
しるる参河の例も思ふべし古事記傳に名義真野
なるなり論い給へし彦麻呂いしり思ふ身惱の約と
小てハありしなり奈夜牟の三言と約とバ奴の一言も
り延喜神名式に美濃國不破郡仲山金山彦神社名神
とありし神ハ古事記の伊邪那美命の火之夜薨云速男

神と生給ふ段に因生此子美蕃登見矣而病臥在多具理迹
生神名金山毘古神云々ある金山ハ仮字にて令疲憊の
畧なりしなり古事記傳にあり又ハ身濡の畧なり小
てもありしなり同記日代宮の段に倭建命取伊服岐山之
神幸行云々騰其山之時白猪逢于山邊其大如牛云々其
神之使者雖今不殺還時將殺而騰坐於是零大水雨打惑
倭建命云々とあれをり伊勢國よての詔に吾足如三
重勾而甚疲故號其地謂三重とあり類ありしなり

飛彈

和名抄に飛彈比太國府名義ハ挽手人より負し名なり
在大野郡

諸國名義考

一延喜民部式に飛彈匠丁とあり賦役令に凡斐陀國庸調俱免每里點匠丁十人每四丁給廩丁一人二年一替餘丁輸米充匠丁食とあり類聚三代拾の美和元年の條弘仁五年五月廿一日云々得飛彈國解備貢上下匠每等有數事畢之日規避課役云々とあり鴨祐之々大八州記に按拙者材木之名而匠工造拙木也此國多材木而其民課役皆為匠丁故以為國名也乎といへり萬葉集に云々物者不念斐太人乃打墨繩之直一道二とあり斐太人之真木流云尔布乃河事者雖通船曾不通とあり立入信友ハこの打墨繩之云々とありて挽板の畧とあり

いりりも或書ふ此國風土記の文として引くは飛彈本美濃國內也然建近江大津宮時自當國良材多出也駄負木行大津如飛也故号飛駄といへるハいりり字音かゝりり心つゞり妄説なり谷川士清ハ蓋其為國山疊谷幽猶衣裳有襷積故名之也といへりりり

信濃

和名抄小信濃之奈乃國府名義ハ信濃國風土記に往昔建御名方神等之所住之地也治天下御神大穴持命又少彦名命建御名方命巡行此國給到坐阿羅野詔此國者木葉草垣葉品々也故云品野今云信濃者音之轉也とあり古夏

記傳ハ八級坂ありゆゑの名ありとあり此ハ古事記ハ
志那陀由布云々とあり哥の志那ハ坂踏みて陀由布ハ
猶豫みて平らかるるざらざるをとりしりし日本書
紀景行天皇卷ハ日本武尊進入信濃是國也山高谷幽
翠嶺萬里人倚杖而難升巖峻磴紆長峯數千馬頓
轡而不進然日本武尊披烟凌霧遙經大山既逮于峯云々
推古天皇卷ハ有蠅聚集浮虛以越信濃坂鳴音如
雷云々云々齋明天皇卷ハ科野國言蠅群向西飛踰臣
坂六十圍計高至蒼天云々云々日本紀畧延長三年七
月二十九日東國氏烟為風多損信濃御坂踏壞云々云々

萬葉集信濃國防人哥ハ知波夜布留賀美乃美佐賀尔
怒佐麻都里伊波負伊能知波意毛知々我多采とあり
を始て後拾遺集新古今集又今昔物語るにも信濃
の御坂の事見え云々此坂を級といはるる志那の
級ハ佐みて加ハ所ありわかれハ佐加ハ級所あり
古事記傳ハ見え云々ハ同記傳ハ科ハ古の榜あり
神樂哥ハ木綿造る科の原とあり諏訪明神御裝束
鏡乃威馬の鎧船の綱など皆科木の皮にて造るなり
あり郡郷の号ハ更科埴科倉科穗科御科仁科蓼科
あり云々云々の科の原よりや有るなりとあり山根

諸國名義考

○上卷 二十六

宗利といひ人この國は行て料布の裁端を我方におこ
せしめ賤の衾をその料をといひりしと麓を布を

和名抄小調布豆岐乃沼能又有信濃望陀等名云々其體
與他國調布頗別異故以所出國郡名為名也とあり料

木より出する國名々國名より出する調布の名々本末を
とらび又思ふ伊勢津彦といふ神大風を起し立去

しよ伊勢國風土記上の伊勢國の條を引小あり延喜神名式
水内郡風間神社あり今も風間村といふあり俊賴朝臣の

哥も信濃なる木曾路のさくら咲も夕風のもありよ
透間ありよる夫木集も信濃路や風のもありよ心せよ

とらゆ花の白く神垣をよあり俊賴朝臣雜談抄も
清輔朝臣茶草紙もど小風祝部の事ありあり信濃ハ

息長野ふてもあり中川頭允ハ萬葉集も三篲均
信濃とありれば條野ありむといひり續日本紀

元正天皇養老五年六月辛丑割信濃國始置諏方國
聖武天皇天平三年三月乙卯廢諏方國并信濃國

上野

下野

和名抄小上野加三豆介乃國府在群馬郡國下野之毛豆介乃國府在都賀郡
名義ハ毛野あり國造本紀も難波高津朝御世元毛野國

分爲上下とありてされバ上毛野下毛野なりと二字と
定られし時は毛字ハ畧りれつれど猶毛といへる名の
うて却て野字とバ唱へばさて毛トハ草木五穀なりと
といへるなりとてそのうめハ木といへる名なり下の紀伊
國の條といへる須佐之男命の木種蒔とも思ひ合とて
筑後國は大方なる歷木株あり高九百七十丈あり
て朝日影ハ肥前の杵島多良岑と覆ひ夕日影ハ
肥後の阿蘇荒山と蔽ひて日本書紀と風土記あり
て御毛國といふこの木僵として後其樹を踏て往來キカフ
ハ弥概能佐烏麼志と哥よもよとて日本

書紀ハ是居於御木川上といふ分註ハ木此云開とあり
萬葉集ハ木と毛とらめ事とありて令義
解ハ謂土地之所生爲毛也とあり外國ハ左氏傳ハ食
土之毛註毛草也とあり字典ハ桑麻五穀之属皆曰毛と
あり素問ハ地有草木人有毛髮應之とありその外ハ
窮髮不毛といへると漢籍ハ間々見えてりさて又
或書ハ引る風土記ハ上毛野下毛野者兩國中間有ニ野
曰佐野笠懸野其野中有一河号渡瀬又有川曰佐野中
川以渡瀬爲兩國境川西曰上毛野東曰下毛野川東爲下
川西曰上古今例也所以流東南也又毛者有田曰毛後除

和名抄_二出羽以天波國府在平鹿郡名義ハ越_ニの道_ノ尻_ヲ道_ノ奥

まどく_ノの出端國_ニるべし續日本紀元明天皇和銅元

年九月丙戌越後國言新建出羽郡許_レ之云々同五年九月

巳丑大政官議奏曰建國辟疆武功所貴設官撫民文教所

崇其此道蝦狄遠憑阻險實縱狂心屢驚邊境自官軍雷

擊凶賊霧消狄部晏然皇民無擾誠望便乘時機遂置

一國式樹司宰永鎮百姓奏可之於是始置出羽國

同年十月丁酉朔割陸奥國最上置賜二郡隸出羽國

とあり國造本紀_二諾羅朝御世和銅五年割陸奥越後

二國始置此國也とありさて或書_二引る風土記の文_ハ

上古此地貢鷲鷹之羽故曰出羽といふハ字よるづ

とるがごとしといふ

諸國名義考上卷終

六
會
題

六
會
題

六
會
題

六
會
題

六
會
題

